

はじめに.....

第1章 今井正の評価をめぐつて

1 本書のねらい.....  
2 今井正略史.....  
3 今井正をめぐる先行研究.....

第2章 軍国と反軍国のあいだ

1 対立と交渉のメロドラマ——『沼津兵学校』  
——九三九年前後の「歴史映画」をめぐる言説  
(1) 盲蛇におじず  
(2) 帝国の空間——「崩壊するものと前進するもの」  
(3) 開かれた空間と閉じられた空間  
(4) 今井正の「心のなか」  
(5) 今井正の「心のなか」

2 軍国的ファミリー・メロドラマ——『われ等が教官』

(1) 軍神もの.....  
(2) 軍国的ハッピー・エンド.....

3 帝国の生産性——『多甚古村』

(1) 「映画の使命は国民指導にある」  
(2) 「完全な失敗作」  
(3) 帝国のは空の空間  
(4) カメラを回し続ける.....

4 あるべきメロドラマ——『女の街』

(1) 銃後のあるべき姿  
(2) 「誰が何と言おうと平気ですわ」  
(3) ラジオを切る

5 『閣下』

6 健全なクリシュ——『結婚の生態』

(1) 映画の「臨戦態勢」  
(2) 相次ぐ「悪評」  
結婚のクリシュ

112 108 105 105 105 105

102

099 094 090 090

085 081 077 073 073

068 065 064

063

049

045

043

039

039

037

025

021

018

017

003

7 帝国の態度と言及——『望楼の決死隊』	118
映画の「決戦」	119
(1) 朝鮮ロケの日本版『ボー・ジェスト』	120
(2) 「帝国」を投影する	122
(3) 「植民地」を投影する	125
(4) 「植民地」を投影する	134
8 背を向ける——『怒りの海』	137
苦悩する軍艦の父	139
(1) フィルムを削る	145
(2) 今井正の沈黙	146
(3) 擬似家族関係	149
重層的テクスト	152
9 帝国の視線と植民地の凝視——『愛と誓ひ』	159
(1) 今井正の沈黙	160
(2) 擬似家族関係	168
(3) 重層的テクスト	168
第3章 欲望と限界のあいだ	159
矛盾と混乱	160
2 二つのテーマ——反戦と弱者	168
3 反戦——『また逢う日まで』	171
(1) 東宝争議という転換点	171
(2) 現実と、それに抵抗する非現実	174
(3) 抑圧されたものの帰還	181
4 反戦、そして弱者——『ひめゆりの塔』	187
(1) 『ひめゆりの塔』をめぐる言説	188
(2) 対立する二つの「声」の狭間で	191
5 弱者、あるいは他者——『あれが港の灯だ』	204
(1) 植民地他者への思い	205
(2) 境界線のアイデンティティ	206
(3) 重なる他者への記憶、パランプセスト	214
おわりに	219
註	225
今井正の再発見——四方田犬彦	252
あとがき	262
主要参考文献	258